

洛陽の白居易遺跡

下定 雅弘

はじめに

小稿は、現段階で明らかになっている、洛陽の白居易関係の遺跡について、中国社会科学院考古研究所の発掘報告などに基づきつつ、その概略を記すことを目的とする。筆者自身がこの課題について新たに調査したり分析したりした内容を報告するものではない。この点、諒とせられたい。

まず、洛陽の白居易の故居である履道里邸について記し、次に白居易の香山寺の墓について記す。

1. 洛陽履道里邸

白居易の洛陽履道里邸の洛陽城における位置については、図 a（平岡武夫編『唐代の長安と洛陽 地図』〔『唐代研究のしおり第七』、京都大学人文科学研究所、1977.11 収載。洛陽地図（一）〕）をご覧いただきたい。地図上では、12-L、唐代の洛陽城の東南の隅に位置していた。

それは現在の洛陽郊外の安楽郷獅子橋村の東口（東北約150m）、洛水の南・伊水の北の田地に在る。図 b（図録『奈良・藤原京建都千三百年 特別展 遣唐使が見た中国文化—白楽天の時代を中心に—』〔奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編集、1995.7〕、「隋唐洛陽城」、64頁）を見られたい。地図の右下に位置している。

1-1 履道里邸宅についての発掘報告

履道里（=坊）の邸宅の発掘調査は、1992年から1993年にかけて、中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊によって行われた。以下、その結果の重要な点について、主に「洛陽唐東都履道坊白居易故居発掘簡報」（『考古』1994年第8期、王岩他執筆）・王岩「履道里故居尋找発掘記」（『光明日報』1993.5.23、第6版）に拠って記しておく。本章では、筆者の知見は、※を付して示しておく。

発掘は、二次に分けて行われた。第一次は、1992年10月から1993年1月。第二次は、

1993年3月から5月。発掘面積はあわせて7249㎡。

周辺の邸宅について。

履道坊の西には集賢坊がある。ここには唐朝の有名な宰相裴度の邸宅があった。北側の履信坊は伊水の用水路を隔てて履道里に向かいあっており、そこには親友の元稹の邸宅があった。

※劉禹錫の邸宅の場所は不明だが、「経過するに慵懶なる莫れ、相い去ること両三坊」（「池上早春即事招夢得」）という近いところにあった。

白居易の邸宅について。

白居易の邸宅の配置、屋敷内の建物の部分と庭園の位置、構造などについては、白居易の詩の中に大量の記述がある。「池上篇」の序には、「地は方十七畝、屋室は三の一、水は五の一、竹は九の一、而して鳥樹橋道之れに間^{まじ}わる」と記している。邸宅の敷地面積は「方十七畝」というと、三千坪近い広さである。※このうち三分の一が建物面積で、池が五分之一、竹林が九分の一だったということである。

※邸宅の面積がほぼ三千坪であることは、以下のように計算される。一畝は、唐代では5.80326a（角川書店『新字源』の度量衡表に依る）。したがって、 $5,80326 \times 17 = 98,65542a$ 。1aは100㎡だから9865.542㎡。これを3.306㎡（一坪）で割ると、 $9865.542 \div 3.306 = 2984.1325$ 坪で、三千坪弱となる。また1aは約30.25坪だから、 $98,65542 \times 30.25 = 2984.3265$ （坪）で、ほぼ同じ結果を得る。埋田重夫『白居易研究 閑適の詩想』（汲古書院、2006.10）も「十七畝」四方（二九五八坪）の履道里邸」（260頁）と計算している。この広さについて驚かれる方が少なくないが、唐代の官僚の宅地の面積はこのようなものだったのである。因みに、柳宗元の莊園については、「園宅地」が数畝、「田」が数頃であり、「数頃」を仮に三とすれば、172980㎡、約400㎡四方の地ということであり（戸崎哲彦「柳宗元の莊園経営」〔彦根論叢〕298、1995.11）、46頁）、宗元の莊園の田地は5万坪を超えている。

白居易邸宅跡、およびその周囲の様子は、元末明初の時期に、大きな破壊を蒙っていて、その遺跡の保存状況はよくない。現在、比較的よく残っているのは、邸宅の西と北側をめぐる伊水渠道、邸宅内の「南園」の中の池沼部分および住宅区の三箇所である。

履道坊の西側に二本の東西に平行して走る水渠が見つかった。幅9.2-11m、長さは128m。二本の水渠は履道坊の西北隅で合流して折れて東に走っている。『唐兩京城坊考』（清・徐松撰、張穆校補）には「按居易宅在履道西門，宅西牆下臨伊水渠，渠又周其宅之北」（李健超増訂『増訂唐兩京城坊考』〔三秦出版社、2006.8〕、363頁）とあるが、発掘

状況から見て、この記述は完全に正確である。

「南園」は、邸宅の南部に位置する。試掘と一部の発掘を経て、ここには大規模な大量の堆積した土の遺存があり、その西側には溝と伊水渠が通じていることを立証した。この堆積土の遺存の範囲は、白居易の詩の中にいう「池」の所在地である。

邸宅遺跡は遺跡発掘区の北部に位置する。牆基（壁や屏の土台）と散水（建物まわりの水切りの舗装）の状況から見て、邸宅には中庁が有り、ほぼ方形を呈していて、東西5.5m、南北5.8mで、東西の両端は回廊を通過して北に向かい東西の廂房（四合院で正房の前の両側の棟）とつながっていた。回廊はそれぞれ長さ15.2m、幅3.2m。廂房は東西対称で、それぞれ長さ約8.9m、幅4m。この遺跡はおそらく白氏の邸宅の門房（門番の詰め所）遺跡である。もしそうならば、白居易の故居には、南に門房が有り、北に上房が有った。これは前後両庭園を持った両進式（庭が二つある方式）の住宅である。

出土品について。

邸宅内の出土遺物は、非常に豊富で、建築材を除けば陶磁器が多い。石・陶・磁の三種の質の硯および酒と茶器は、これらの遺物と白居易とが密接な関係にあった可能性があり、白居易が生前に執筆や作詩に励んだり、酒と茶を好んだ生活のようすを想像させてくれる。

特筆すべきは、「経幢」（仏教の経文を刻した石柱）二件の出土である。一件は、下部が残存していて、六面体。残っている部分の高さは31cm。一面の幅は15.5-17cmで、六面には均しく楷書の漢字が刻まれている、現存するのは230余字で、『陀羅尼經』の経文である。その中には、「開国男白居易造此仏頂尊勝大悲」等の文字がある。もう一つは、両面を残しているだけで、26文字が残っている。その中には「唐大和九年……心陀羅尼」などの文字が見える。この二件の「経幢」は、白居易が出資して造ったものにちがいない。

1-2 履道里邸の想像復原図

この白居易の邸宅について、発掘の成果を参照して、洛陽白居易研究会副会長の白高来氏らが尽力し、建築家の王鐸氏によって「想像復元図」が描かれた。どの程度、本来の邸宅に近いかは、なお今後の研究を待つ必要があるが、現在のところ、これほどわかりやすく描かれた白居易履道里邸宅の想像図は他にない。ここにそれを掲出する。図cを見られたい。

掲載した履道里の故宅の想像復原図は、拙著『白楽天の愉悅—生きる叡智の輝き—』（勉誠出版、2006.4. 262.263頁）を転載したものである（以下の図についての説明も拙著のそれにほぼ等しい）。この想像図は、右上に記された文章に「戊辰仲秋嵩石図^{えが}を^{えが}書き并せ

て記す「楊嵐書す」とあるのによれば、1998年の仲秋（陰暦八月）に、嵩石なる人が図を描きかつこの「記」も記し、楊嵐なる人がそれを清書したということである。ただし、この図は、残念ながら、平面図の番号に不鮮明なものがあり、かつ「図注」として記す各所の名称も判読しがたいものが含まれている。この不鮮明部分を明瞭にして拙著に掲載することを考え、白氏にも協力を依頼したが、王鐸氏が英国に滞在中など種々困難があつて断念せざるを得なかった。そこで、図について、「地上篇序」に見えているものに留意しつつ簡単な説明を施しておく。

全体について 故宅は、「北園」と「南園」により成っている。池は「北園」と「南園」の両園に広がっている。池は「南園」のものがかなり大きく、「北園」のものは小さい。「北園」の池は、瓢箪状で、西方部分が「水閣池」、東方部分（建物の北）が「後院池」と名づけられている。「南園」の池は「白蓮池」と名づけられている。

「北園」について 「北園」の東側に建物の群れがあり、この中央に「北院」と「南院」がある。「北院」と「南院」とは「中門」で結ばれている。

「北院」について 「北院」は東部に「廂房」がある。上部には「故事堂」がある。

「南院」について 「南院」の両脇に「廂房」（正房の左右に建てる二棟の建物。ただし、この図には「正房」は描かれていない）があり、「南院」の下部にある門は「府門」である。

「北院」「南院」の西側にあるのが「水亭院」で、その北部に「水齋（堂）」が、東部中央に「水亭」があり、南部に「紫藤架」がある。

「水閣池」（「北園」の池の西方部分）の西にあるのは「臨閣亭」で、北にあるのは「竹閣」。「水閣池」と「後院池」の中間、瓢箪のくびれにあたる最も細い所にかかっているのが「竹橋」。

「北院」「南院」の東側、下方の院が「竹院」、上方の院が「槐亭院」。「槐亭院」の西側に「灶房」（調理室）があり、その上に「包童房」（コックの部屋）がある。

そのまた東側、図の右端の建物が縦に並んでいる所に、上から、「槐亭」、召使いの部屋「女僮房」「男僮房」がある。

建物群の右側下部に「東院門」を挟んで、右側に「車轎房」（馬車を置く部屋）があり、左側に「馬房」（厩舎）がある。

「北園」と「南園」との間 「北園」と「南園」とは道で隔てられている。道の左端にあるのが「大門」で、その中央、「北園」と「南園」の池を繋ぐ箇所にあるのが「橋亭」である。

「南園」について 「南園」の池にある三つの小島が「地上篇序」にいう「三島」であり、うち左側の大きい二つの島に通う道が、西から「西平橋」「中高橋」（「図注」は「中島橋」としている）である。「中高橋」を渡った島のまん中にあるのが「中島亭」。

「南園」の池の右上部に三つの建物が横に並んでいるが、これが右側から順に「池東粟廩」、「池北書庫」、「書楼」である。池の左側、伊水から水が流れこんできて広がる所の上部に、上から「池西廊」と「琴亭」とがある。「池西廊」の西方、「大門」の右下にある大きな建物が「池西楼」。池の南部に大きく広がっているのは、竹林である。

2. 香山寺と白居易の墓

この章は主として、洛陽市龍門文物保管所（温玉成執筆）「洛陽龍門香山寺遺址的調査与試掘」（『考古』1986年第1期）および松浦友久編『漢詩の事典』（大修館、1999.1）中の植木久行執筆「名詩のふるさと（詩跡）」に拠って記す。

香山寺は、「龍門十寺」の一であり（白居易「修香山寺記」〔前詩後筆本の卷六十八〕に「洛都四郊、山水之勝、龍門首焉。龍門十寺、觀遊之勝、香山首焉」と、初めて「龍門十寺」の名が見える）、洛陽市の南郊12、3キロにある名勝龍門の東山南端に在った名刹である。香山寺は、北魏の熙平五年（516）に創建され、唐代に最も隆盛し、元末には滅んだ。

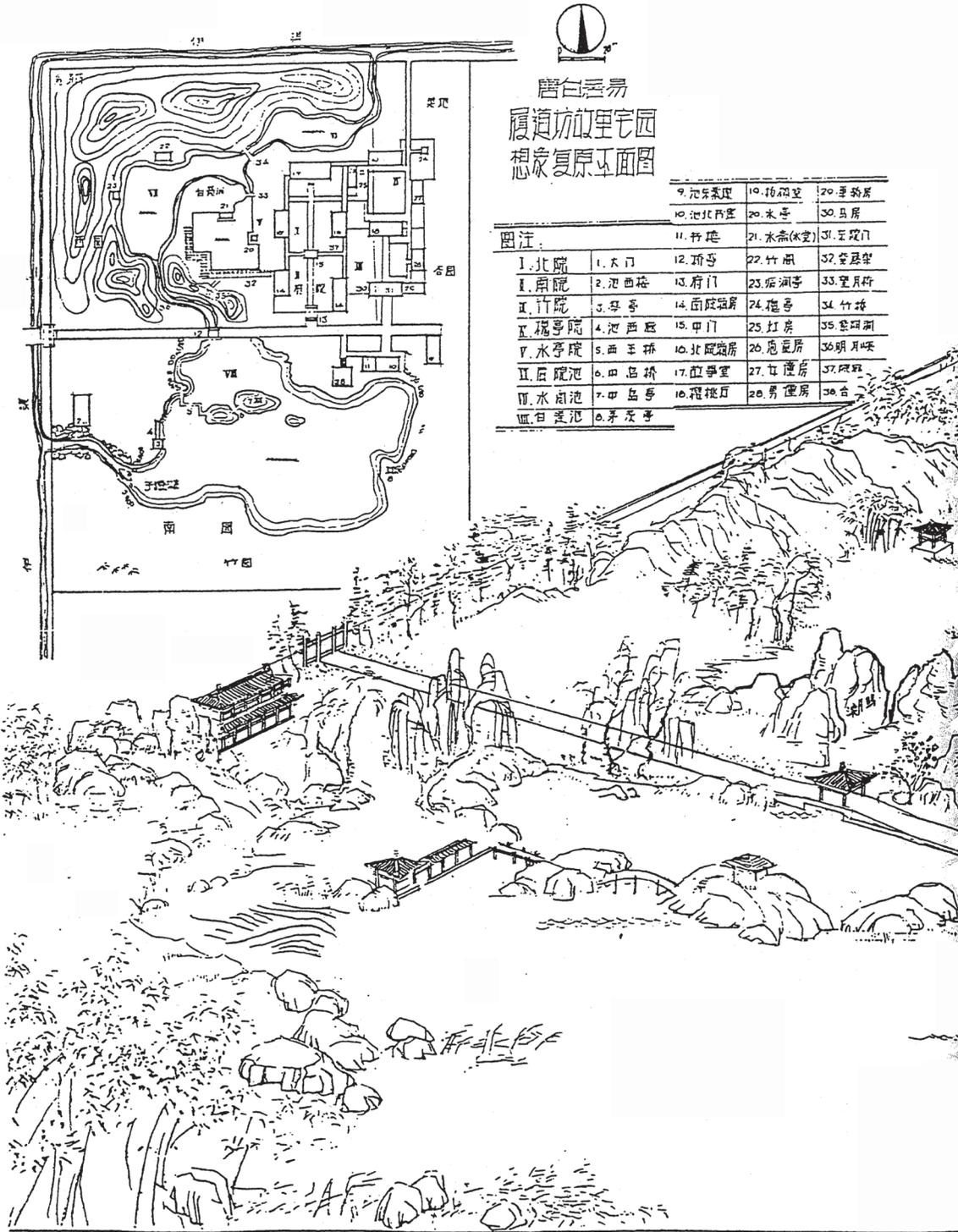
白居易は晩年仏教信仰を深めて、履道里に定住して以後、しばしばこの寺を訪れている。白居易は、大和五年七月に没した元稹の墓誌銘を書いたときの謝礼6、70万銭相当を、荒廃久しい香山寺の修復費用として寄進している（「修香山寺記」）。晩年の白居易の精神生活は香山寺を中心に営まれ、自ら香山居士と号した。白居易は会昌六年、七十五歳で、履道里の自宅に没したが、その遺言にしたがって、香山寺の如満禪師の墓塔の側に葬られた。

「香山寺」に現存する白居易墓の周辺は、近年「白園」として整備されており、ここに白居易の墓「唐少傅白公墓」がある。しかし、この「香山寺」は、清の康熙四十八年（1709）、学政湯右曾・河南知府張珩・洛陽知県呉徽纒らが、龍門東山の北側の山腹の旧寺（龍門十寺の一である「乾元寺」）を修理復興して、「香山寺」と名づけたものである。白居易の墓の再建は、二年前の「香山寺」の再建に続く一連の事業だったから、この墓も本来のものではない。

温玉成に拠ると、本来の香山寺は、東山の北端ではなくその南端、今の洛陽軸承廠の療養院およびその北側の山腹の地に在った。図dを見られたい。この寺の「西院」の跡地西北の山麓の台地が寺僧の埋葬地であったという。ならば、如満禪師の墓塔およびそのそばに置かれた白居易の墓も、ここにあったのであろう。

おわりに

拙文は、2007年6月13日、洛陽研究会の研究例会で発表した内容をまとめたものである。白居易の履道里の邸宅は、白居易が洛陽に閑居して以後の文学の主な舞台となっ



白居易
履道坊故里宅园
想象复原平面图



图注:

I. 北院	1. 大门	12. 桥亭	22. 竹园	32. 望月楼
II. 前院	2. 池西楼	13. 府门	23. 观涛亭	33. 望月楼
III. 竹园	3. 琴亭	14. 面院厨房	24. 榭亭	34. 竹楼
IV. 槐亭院	4. 池西廊	15. 中门	25. 打房	35. 望月楼
V. 水亭院	5. 曲玉桥	16. 北院厨房	26. 危屋房	36. 明月楼
VI. 后院池	6. 田忌桥	17. 拉琴室	27. 女德房	37. 观涛
VII. 水榭池	7. 田忌亭	18. 槐桃厅	28. 男德房	38. 台
VIII. 白莲池	8. 茅茨亭			

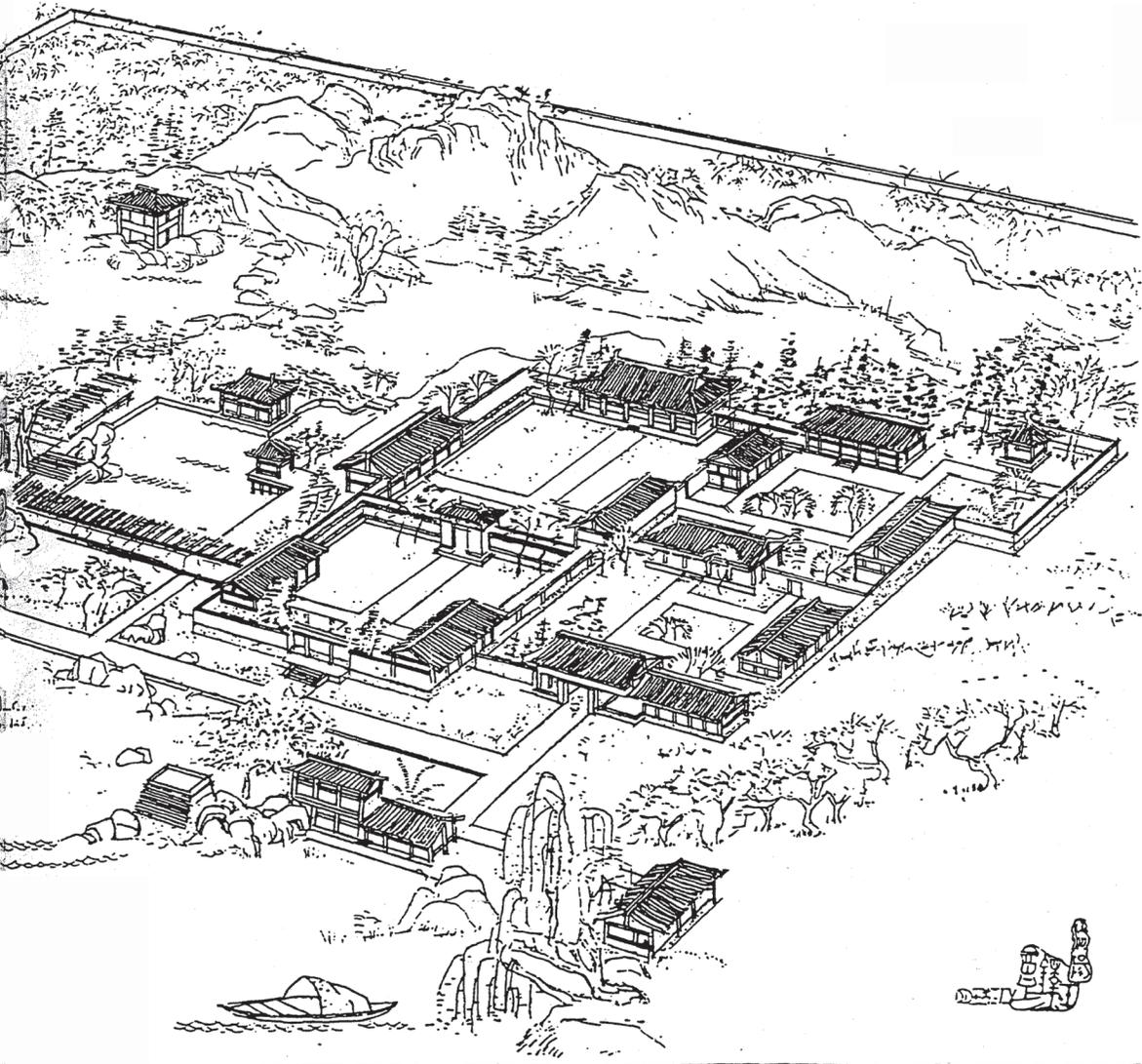
图c 白居易邸宅图

白居易邸宅圖

長慶四年（八二四）、白居易五十三歳、時任杭州刺史、買洛陽履道坊故散騎常侍楊憑宅、地方十七畝、屋室三之一、水五之一、竹九之一、而島樹橋道間之。五十八歳、以太子賓客分司東都、自此居洛、不復出任、與崔度、劉禹錫等唱和于竹池林泉間、并開西園、修葺池館林篁、至七十五歳、後履道園卒為佛寺、後唐時為普明禪院、北宋時因其藏大字佛經及白公文集、故世稱大字寺園、後張氏得其半為會隱園、其時園內樂天石刻尚多、水竹尚中洛陽、今繪其想象復原圖、為日後興建洛陽歷史名園參考、其園景布局、屋室景石、均依白氏詩文所記所述、并參考唐代官宦邸宅形制而繪。

戊辰仲秋高石繪

圖并記楊風書



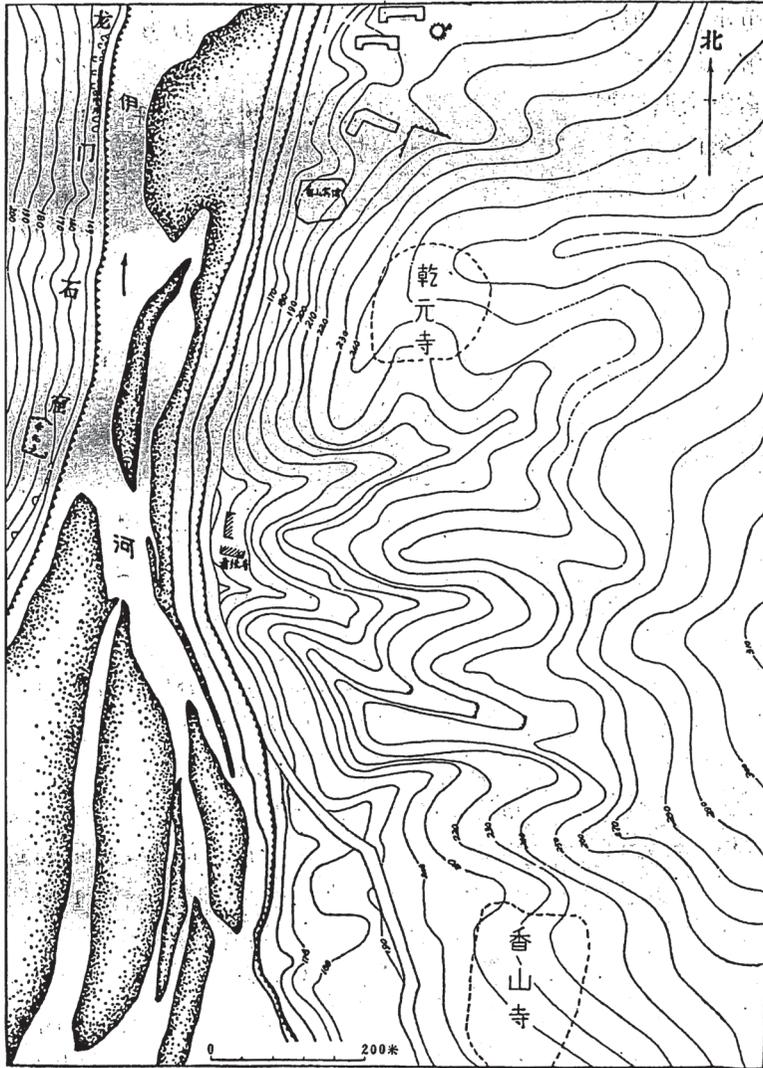


図 d 香山寺位置図